戦後の短歌

＜現代＞はどううたわれたか

斎藤正二編著

565

現代教養文庫

社会思想社刊

編著者略歷

斎藤正二(さいとう　しょうじ)

1925年　東京に生る
1957年　東京大学文学部大学院卒業。この間,「短歌」編集長などを歴任
現　在　二松学舎大学助教授
《訳　書》　アラン「芸術に関する101章」(平凡社版世界教養全集第12巻)ミショー「文学とは何か」(同第13巻)スウィフト「ガリヴァー旅行記」(角川文庫)ブドゥワン「仮面の民俗学」(クセジュ文庫)ほか
《現住所》　東京都杉並区堀之内1の273
TEL (311) 7626

現代教養文庫 565　戦後の短歌　© 1966

昭和41年7月30日　初版第1刷発行

編著者　斎藤正二
発行者　土屋実
本文印刷　㈱式会社 文弘社
製本　合資会社 黒田製本所

発行所　株式会社 社会思想社
東京都千代田区神田駿河台3—5
電話代表 (292) 2611
振替東京 71812

担当　八坂安守・田中嘉人

落丁乱丁は直接小社にお送り下さればお取替えいたします

現代教養文庫の定価はすべてカバーに明記してあります

現代教養文庫
565

戦後の短歌

〈現代〉はどううたわれた

斎藤正二編著

社会思想社刊

まえがき

芸術は〝時代の子〟であるとも言われ、また〝社会の鏡〟であるとも言われております。この公理は、一つには、時代の推移や社会的変革が不可避的に芸術作品の裡に投影される事情を説いたものでありますが、いっぽう、時代精神や社会機構が一定の変革に向かうことを余儀なくされた場合に、その余儀ない変革の予兆を芸術作品が告げ知らせる、という意味をも含めております。芸術には、それだけの力が包蔵されているのであります。

短歌も、それが文芸であるかぎり、かならず時代や社会の変転を反映するはずですし、いっぽう、到来すべき望ましい諸変革のための階梯を築くものであらねばなりません。わたくしたちは、あの飛鳥時代の短歌に接するとき、そのひびきのなかに、さく花の匂う寧楽時代の到来がすでに予報されてあったことを検めずにはいられません。明治年代に入って、新詩社の歌人が精一杯におのがじしの倘憬をうたいあげたのも、自我解放の時代がもうすぐ間近に迫ったことを予告したものにほかなりません。どの時代の和歌文芸も、反映すべきものは残らず反映せしめているし、予告すべきものは剰さず予告しています。千年の和歌史を辿ることは、とりもなおさず、日本の時代思想史ならびに社会風俗史を跡づけることでもあります。形式はちっぽけであったけれど、否むしろちっぽけであったがゆえに、短歌は、それだけの大きな役目を果たすことができたのでした。今後とて、同じように、短歌は〝時代の子〟であり〝社会の鏡〟であり続けることでありましょう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

従って、この書物の標題である「戦後の短歌」とは、わたくしたち同時代の人間が戦後をどのように生き抜いてきたかという社会的事実の投影を印画紙に焼き付け、どのような生活原理の変革を履んできたかという思潮史的足跡を定着させる営みの総称でなければなりません。はたして自分のごとき者になし畢せるかどうか心許なく思われたのですが、兎も角も努力してみました。

第一編は、戦後社会の反映を戦後の短歌作品の裡に検めながら、しかも市民たちが与えられた現実打開のために如何に真剣に生き抜いたかという精神的軌跡に照明を当ててみました。そのために、歌壇圏外にある無名の作者たちに視線を向ける考慮も払いました。原則として歌集単位に作品を輯集したことも附言しておきます。

第二編は、戦後歌壇で活動した作家たちを、謂わば世代別に鳥瞰したものです。じつは、もっと若い世代にまで視野を拡げたかったのですが、ページ数や時間の制限があり、断念せざるを得ませんでした。

第一編、第二編とも、記述の範囲を昭和三十六年前後の事項に劃りました。戦後短歌史のなかでわたくしなりに精通している部分といえば、その範囲にとどまるからです。その範囲内でも、あるいは相当に見落としもあるかと思いますが、他日の補正を期します。

本書刊行にさいして、社会思想社の田中矗人氏の泪ぐましい御尽力のあったことを感謝します。

このささやかな書物が詩歌を愛する多くのひとびとの手に渡ることを喜びといたします。

斎藤正二

目　次

まえがき

第一編　戦後短歌のあゆみ―現代短歌の描く戦後社会史―

終戦近く……一〇
一九四五年八月十五日……二〇
復員兵士のむれ……二三
占領軍到着の前後……二七
公報いたる……三〇
子を戦争に失いて……三三
悲しみはあらたに……三六
学徒兵帰る……四〇
国破れて山河あり……四七
焦土に生き堪えて……五四
焦土の眺め……六〇
戦場の回想……六五
自由解放のこえ……七二
浮浪者のむれ……七五
飢えを堪えつつ……七七
新たに生きん決意……八一
旧き制度の崩壊……八六
財閥解体命令……八九
農地改革の指令……九〇
天皇神格否定宣言……九一
「人民短歌」の創刊とその後……九二
新選挙法による初の総選挙……九五
復活メーデーの日に……九七
南方より引揚者かえる……九八

満州より引揚者かえる……一〇三
復員者を迎えて……一〇九
未帰還兵士、ついに還らず……一一〇
懺悔のなみだ……一一四
新憲法の公布……一一九
第二芸術論の嵐……一二一
総合雑誌「八雲」の創刊……一二六
獄中のうた……一二八
二・一ゼネスト中止……一三一
新歌人集団の結成……一三三
主婦の民主的自覚高まる……一四〇
東大に女子学生誕生……一四三
主婦の大学入学など……一四四
戦争未亡人の周囲……一四五
アメリカびとに接して……一四六
没落階級と呼ばれて……一四八
戦後世相の断片……一四九
老いらくの恋……一五五
糧米を背に古都を訪ねて……一五八
児童福祉法の施行……一六〇
極東国際軍事裁判終わる……一六五
土屋文明と「アララギ」文明選歌……一六七
ドッジ・ラインによる経済再編成……一七二
六・三・三の新学制、施行に入る……一七三
レッド・パージはじまる……一七九
下山事件・三鷹事件・松川事件……一八〇
中華人民共和国の成立……一八二
平和運動の高まり……一八三
朝鮮戦争おこる……一八七
前田夕暮逝く……一九二
曇りよりさしくる光……一九四
サンフランシスコ講和条約調印……一九六
岡麓逝く……一九七
斎藤茂吉、文化勲章を受く……二〇〇
対日講和条約発効の前後……二〇三
「多磨」の解散……二〇四

おんなうたの興隆……二〇八
病歌人の系譜……二二〇
斎藤茂吉逝く……二二六
日韓漁業問題つづく……二二一
内灘試射場問題おこる……二二二
釈　迢空逝く……二二三
奄美群島の日本復帰……二二八
総合雑誌「短歌」の創刊……二二九
〝死の灰〟に抗議して……二四一
〝短歌の若返り〟を求めて……二四六
新しき世代の抒情……二四八
『平和歌集』『広島』『松川歌集』など……二五〇
ハンゼン氏病患者の短歌……二五四
「朝日歌壇」の三選者……二五八
太田水穂逝く……二六〇
砂川基地問題、深刻化する……二六二
日本経済、空前の好況に賑う……二六三
原爆記念日にうたう……二六四
日ソ間国交回復の共同宣言……二六九
会津八一逝く……二七〇
日本の国連加盟、承認される……二七三
尾上柴舟逝く……二七四
新しき〝生の原理〟の探求……二七六
日教組、勤務評定に反対……二七八
安保反対闘争のころ……二八〇
前衛短歌の風靡……二八四
吉井　勇逝く……二八八
農業基本法の成立……二九一
実生活者と作家と……二九二
総合雑誌「短歌研究」の再出発……二九四
子規没後六十年……二九六
挽歌一束……二九八

第二編　戦後短歌のひろがり―現代歌壇を形づくる作家たち―

「昭和短歌集」（『昭和文学全集』第四十一巻）……三一〇
「戦後中堅代表作品集」（「短歌」昭和三十二年七月号）……三六〇
「戦後新鋭百人集」（「短歌」昭和三十一年七月号）……三六二
「戦後新鋭百人集・続編」（「短歌」昭和三十一年八月号）……四一〇

人名索引（巻末）

第一編

戦後短歌のあゆみ

―現代短歌の描く戦後社会史―

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

岡　麓

昭和二十年三月十三日夕

入日空惜む名残はわたくしの身にのみかかる嘆きならずも（離京）

同夜空襲の火は神田銀座を火の海とせり

今見てゐるそのごとく火はわが家をも焼き払ふべく襲ひ来らむ

かかる時やまひづきては去りがたく思ふものからとどまりかねつ

十四日朝代々木山谷の家を老妻と立つ、子供三人、橋本竹治氏附添ひ八王子迄電車に乗りぬ

■終戦近く

昭和二十年に入って、太平洋戦争の戦局はいよいよ日本にとって不利となっていくばかりであった。前年七月にサイパン島の守備軍が全滅（大本営司令部の発表は、これを「玉砕」と呼んだ）して、しばらくこの島に空軍基地の設営を急いでいたアメリカ軍は、準備万端ととのうと、B二九爆撃機をとび立たせて、日本本土に対する連続爆撃を開始した。昭和二十年一月からは、ほとんど毎日のように、日本本土のいずれかの軍施設もしくは軍需工場の上空に飛び来たって、爆弾や焼夷弾の雨を降らせた。そして、三月ごろからは、東京や大阪などの大都市の住民街を襲って焼夷弾を注ぎ、火の海と化さしめた。防空頭巾をかぶりゲートルを巻いた市民たちは、なす術も知らず、ただ逃げまどうのに精いっぱいという

空襲の焼灰が降る朝早くせきたてられて家を立ち出づ

今朝の日のあやしく赤き空にむき都はなるる名残を惜む

住み馴れし二十年余の知人の誰一人にも別を告げず

ここに住みわが身終へむとねがへりし心たがひぬいつまで生きなむ

去りがてに思ふものから時せまり促されては友に被負りぬ

わが年齢を今かんがふるにあらねどもたち帰り来む希望更になし

八王子の街を背負はれ汽車に乗る老人をふりむく人に余裕なし　―歌集『涌井』―

ありさまであった。

軍当局は、防空要員以外の老人や子女の疎開を勧告したが、頼るべき知り合いを地方にもたぬ人たちは、都会に残るより仕方なかった。子どもたちには集団疎開という便宜がとられたが、老人の場合にはそう簡単にいかなかった。その間、アメリカ空軍の激烈な空襲は、つぎつぎに地方都市にも及んでいった。

上掲の岡麓の作品は、三月十日から集中的に東京市街を襲ったB二九爆撃機の苛烈な攻撃を目のあたりにして、ついに信州へ疎開することを決意した老人の、あわただしい離京の感懐をうたったもの。岡麓の家は旧幕府の御殿医で、祖先以来江戸にのみ住み続けて来たのだが、戦火に追われて、その父祖の地を去らねばならなくなったのだ。後ろ髪を引かれ、せき立てられながら東京を去って行く日の悲しみが籠められてある。麓は二度と東京に帰れなかった。信州で悲しみを歌いつづけて死んだ。

前川佐美雄

いきどほる心もあらず無頼なる人間の徒となりて落ち行く（四月三日、山陰線）

かなしみといきどほりとが交々に或はあらしの修羅なして過ぐ

とどろきて汽車鉄橋を過ぎゐればその深き谿に咲く花も見ぬ

かかる日にたしなみを言ふは愚に似れどひと無頼にて憤ろしも

北ぐにの海に入らむとする川のたゆたふ水に雨さむく降る

雪どけの赤濁りみづが渦巻きて海にそそぐへも汽車ははしれり

前ページの岡麓の作品に「老人をふりむく人に余裕なし」という、悲しみとも悔しみともつかぬ嘆声が聞かれるが、じっさい、あの当時のことを想起すると、ひとびとは浮き足たって右往左往しているばかりであった。他人のことなんか構っていられない、といった心理状態であった。戦後になって人心の荒廃が嘆かれるようになったけれど、その荒廃は既に終戦間際の時期から顕著になりつつあったのである。岡麓のような繊細な感受性のもちぬしは、早くからこのことを感じ取っていた。この意味でも、短歌文芸は各時代各エポックの庶民感情の的確な記録の役割をはたしてきたことがわかる。記念碑的芸術の一つなのだ。

上掲の前川佐美雄の作品も、岡麓のそれに劣らず貴重な記録である。歌集『積日』の後記を見るに、「昭和二十年三月十三日夜、大阪はその最初の大空襲によって旧市内の大半は灰燼に帰した。それまでは疎開など宛で他人事みたいに考へてゐたが、自

がらくたに違ひなけれど炊ぐべくがらくたの鍋もたづさへて持つ

つねの日の旅にあらざる汽車にゐて山陰の海を妻子と見けり

火の街をのがれ来りて妻子らと因幡の国にゆふぐれて著く

疎開せるいのちを思ひ雪解みづ逆まく川のたぎちに見入る（丹比村）

芽ぶかんとする大木のもとに立ち妻子とならび立ちてかなしき

春がすむ山にむかひて七日めによごれし指のつめ切りてをる

妻子らをいなばの国におくり来て思ひふかかる七夜のねむり

―歌集『積日』―

分には老いた母と幼い子供があり、妻も余り達者でないので、遽かに意を決して鳥取県の山奥の地に転住させることにした。尤も自分は疎開など出来る自由を禁ぜられてゐたが、それ故に家族だけは安全な地に住ませておきたいといふ念ひが強く、それで自分の気持の上の負担はかなり軽減されたのは事実である。今からすれば奈良のやうな所から何を慌ててと笑はれさうだが、その時はさうは思はれなかった」とある。事実はこの後記のとおりであったと思われる。これらの事実を踏まえて、短歌作品は作られた。つまり、短歌文芸の骨子は、ある生活的事実によって触発される〝こころの事実〟を表現するというに帰する。混雑する列車内での憤りは、そのまま、当時の市民のやるかたない精神的激動の数瞬の容貌を彫塑像たらしめている。「かかる日に」「つねの日の旅にあらざる」と歌って、しかも二度と変更のきかぬ人間存在の塑像を築き上げているところが尊いのである。

吉野　秀雄

吾妹子が位牌の前に血しほ吐き事態をなげくゆとりだもなし（病臥二句）

血をはきし病の床に腕伸べて柱をたたく何のなぐさぞ

関東全区空爆の夜なり痰壺を闇につかみて血を吐くわれは

病み心いきどほろしも配給日を十日過ぐるに味噌の貰へぬ

病み床に君が庭べの紅梅をおもふ時しもその枝たまひぬ

自転車に乗りて娘のさがしこし卵九つ真玉の如し

国じゅうのひとびとが浮き足たっている間にも、戦局は刻々に窮迫化していた。既に沖縄に上陸したアメリカ軍は、物量に物をいわせて包囲網をちぢめつつあった。B二九爆撃機の地方都市に対する空襲はますます激しくなり、海岸線にはグラマン戦闘機の攻撃や艦砲射撃が頻繁に加えられるに至った。大本営では、国民に呼びかけて、〝本土決戦で最後の勝利を握ろう〟などと無茶なことを言いだした。ヨーロッパにおけるドイツの抵抗も次第に精彩を失い、ついに五月にはドイツ無条件降伏の報が知らされた。学徒勤労動員の名のもとに軍需工場に駆り出された女学生までが、白鉢巻を巻いて、全世界を敵として戦う祖国のために死のうなどと口々に叫び、悲愴感におのいていた。

老人や児童の疎開は、曲がりなりにも、着々と進んでいた。都会のひとびとは、大切な家財を農村に預ってもらったりしていた。しかし、かかるさいに、折悪しく病臥

大挙夜襲を告ぐるラヂオの一点の燈みつめて
病めば苦しゐ

夜襲爆撃のあやしき闇にたまきはるいのち潜
めて血ははき吐きつ

枕より一人静の鉢みれば春深むまで病みこや
りけり

さ夜床の枕の上に防火頭巾置きてぞ病めりう
つし身我は

薬のむ毎に吸呑の水かけてひとりしづかの鉢
をつちかふ

病みわれに固飯食はすうからの粥はひとき
は薄かりなむか

四畝半の菠薐草を目にかぞへただにたのみて
病やしなふ

―歌集『寒蟬集』―

生活を送っている少数の人たちは、どうにも身動きが出来ずにいた。上掲の秀歌をうたった吉野秀雄もそのひとりであった。

この歌人は、前年夏にはつ子夫人を喪って悲嘆に暮れていたのに、こんどは自身が肺結核に苦しめられることになったのである。食糧にも衣料にも事欠く時期に夫人を看護する辛酸には、察するに余りあるものがある。愛妻の遺体を納むべき棺さえ容易には入手しがたかったのであった。

炎天に行遭ひし友と死近き妻が棺の確保打合はす（玉簾花）

九州を米機の襲ふ夕まぐれ妻の呼吸のやうやくけはし

遮蔽燈の暗き燈かげにたまきはる命尽きむとする妻と在り

葬儀用特配醤油つるしゆくむなしき我となりはてにけり

―歌集『寒蟬集』―

現実は斯くすさまじいものであった。作者は、この厳しい現実を潔く身に引き受け、悲嘆と病臥とを克服して、生き抜いた。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com